

山本笑月の蔵書印

磯部 敦

1 緒言

山本笑月と聞いてまず連想するのは、『明治世相百話』(春陽堂、一九三六年)だろう。明治時代について記した随想記類では、鶯亭金升『明治のおもかげ』、鏑木清方『こしかたの記』、篠田鉦造『明治百話』、野崎左文『私が見た明治文壇』などととともに、必読文献のひとつに数えられるよう。

山本笑月について一言しておく。明治六年一〇月五日生、昭和二年五月一〇日没、享年六四。本名は松之助。長谷川如是閑、大野静方の実兄にあたる。本町側、鶯蛙会といった狂歌連に属していたが、その活動の一端については、拙稿「如是閑旧蔵狂歌本の来歴」(二〇〇五年三月中央大学図書館発行『中央大学所蔵狂歌関係書解題目録』)にてふれたところでもあるので参照されたい。著書としては前述の『明治世相百話』のほかに、『謡曲座右抄』(江

島伊兵衛、一九一〇年)がある。

ところで、山本笑月の蔵書印については『近代蔵書印譜』(青裳堂書店、日本書誌学大系41、『蔵書印提要』(同44、『国立国会図書館蔵書印譜』(同70、『新編蔵書印譜』(同79)などの印譜類には見あたらず、これまで不明のままであったが、中央大学図書館が収蔵するところの長谷川如是閑旧蔵書のなかに山本笑月の蔵書印が散見されたので、ここに紹介する。ただし今回調査したのは、如是閑旧蔵書のうちの戯作(洒落本・人情本・読本・合巻等)、俳書、狂歌本であること、付言しておく。

2 笑月の蔵書印

これまでに確認しえた笑月蔵書印は三種。便宜上これをABCの三つに分けたが、形状は図版を見ていただき

たい。また、山本家の蔵書印もみつかつたので、あわせ
て掲載する。なお付言しておけば、A印が押捺されてい
る『婦足禿』には、笑月の実弟にあたる大野静方の蔵書
印（近代蔵書印譜）三編所載のものと同印、二・八×一・三
（糶）も押捺されている。

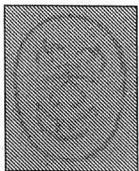
A印（朱印、一・四×一・四糶、図版は『妙伝集』より）



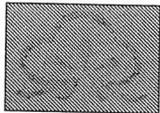
- 『しづかうた』（鳥居清長画）
- 『真女意題』（森羅万象、天明元年）
- 『青楼小袖孔雀染勒記』（山旭亭真婆行、寛政年間）
- 『廓大帳』（山東京伝、寛政二年）
- 『京伝予誌』（山東京伝、寛政二年）
- 『大磯風俗仕懸文庫』（山東京伝、寛政三年序）
- 『婦足禿』（成三樓酒盛、享和二年序）

- 『手管独稽古』（富久亭三笑、享和二年序）
- 『起承転合』初篇（十返舎一九、享和二年）
- 『仇報孝行車』（南柚笑楚満人、豊国画、文化元年序）
- 『敵討遠森渡』前編（南柚笑楚満人、豊広画、文化四年）
- 『気替而戯作問答』（山東京伝、豊国画、文化一四年）
- 『廓華勝山結』（山東京山、天保一二年再版）
- 『妙伝集』（同人庵、明治四四年）

B印（朱印、一・八×一・四糶）

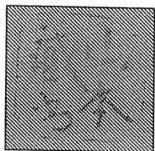


- 『しみのすみか物語』（石川雅望、文化二年）
 - 『色音論・諸国盆踊唱歌』（明治一六年）
 - 『色音論・諸国盆踊唱歌』（明治一六年）
 - 『色音論・諸国盆踊唱歌』（明治一六年）
- C印（緑墨印、一・〇×一・四糶、図版は『しみのすみか物
語』より）



- 『武玉川』（紀逸）
- 『諸家必読開放題』（善誣主人）
- 『狂歌次郎百首』（六樹園撰）
- 『当世絵入後室色縮緬』（西沢一風、享保三年）
- 『万載狂歌集』（四方赤良、天明三年）
- 『狂言鶯蛙集』巻一（朱楽菅江、天明五年）
- 『徳和歌後万載集』（四方赤良、天明五年）
- 『くろうるり』（盧橋庵、天明五年）
- 『狂歌類題杓子栗』（便々館湖鯉鮒、寛政一一年）
- 『しみのすみか物語』（石川雅望、文化二年）
- 『梅かえ物語』（六樹園飯盛、文化七年）
- 『狂歌画像作者部類』（石川雅望、文化八年）
- 『修紫田舎源氏』（柳亭種彦、文政二〜天保一三年）
- 『開卷百笑』（立川焉馬、天保一〇年）

山本家蔵書印（朱印、二・八×二・八糶）



- 『修紫田舎源氏』（柳亭種彦著、文政二〜天保一三年）

3 C印について

A印とB印は印文じたいに「笑月」とあるので問題な
かろうが、松紋印（C印）については説明を要しよう。

『武玉川』『色音論・諸国盆踊唱歌』『開卷百笑』などに
は、この松紋印以外の蔵書印が押捺されていない。とい
うことは、これらの書籍を蔵していたのは、松紋印を蔵
書印とする人物と長谷川如是閑のふたりであった可能性

が高かるう。そこで注目したいのが、松紋印が押捺された狂歌本である。拙稿「如是閑旧蔵狂歌本の来歴」でも触れたことだが、如是閑旧蔵の近代狂歌本は明治期の本町側・鶯蛙会の狂歌本が主だったものであり、また、野崎左文から笑月に献呈された狂歌本もある。松紋印の押捺された狂歌本は天明狂歌を代表するものであるが、笑月の属していた本町側は天明ぶりを標榜する一派であった。つまり、如是閑に近しい存在で、なおかつ天明狂歌を好んだ人物として挙げられるのが、実兄の山本笑月なのである。笑月の本名は松之助。この松紋は、本名の「松」にちなんだものかと思われる。

この松紋印が押捺されている『紫田舎源氏』には「山本蔵書」なる蔵書印が押捺されているのだが、松紋印が山本笑月の印だとすると、「山本蔵書」も笑月の生家である山本家の蔵書印かと考え、ここに掲載した次第である。

さて、これら三つの蔵書印がどのように使い分けられていたのか、という問題がのこる。中野三敏氏『江戸の板本』（岩波書店、一九九五年）によれば、「名古屋の富田新之助氏や相見香雨氏の如く、自から稀本・珍本と認めたいものは緑印を以てするというような区別も、それぞれ

にあった」ようだが（二六五頁）、笑月の場合、そういう使い分けを指摘しうるほどの稀書珍本の類があるとは思えない。おおまかにいって、洒落本や黄表紙はA印、狂歌本はC印という分け方は指摘できようか。『しみのすみか物語』のC印は、六樹園（石川雅望）に関連して押捺されたのかもしれないが、なにぶん絶対量が少ないため、つまびらかにはしえない。B印についても同断である。

以上、笑月の蔵書印について述べてきた。状況証拠からみて松紋印を笑月のものとしてきたが、決定的な証拠はなにひとつない。ご教示いただけたら幸甚である。

（いそべ あつし・中央大学大学院）